2012年01月23日 中日新聞 朝刊 29頁

離れられぬ「家族」

「明るい気持ちに」

全国で飼われている犬、猫の数は、今や十五歳未満の子ども人口を上回る。東日本大震災では、ペットを抱えながら避難する被災者も多かった。災害では人命の救助・保護が最優先だが、ペットを一「家族」と考える人も増えている。飼い主の日ごろの備えや支援団体との連携が必要となる。（鈴木龍司、蜘手美鶴、加藤美喜）

避難所 冷たい視線も

■立ち入り禁止

宮城県石巻市の無職斉藤栄子さん(三)は、自宅に一人でいる時に、猛烈な揺れを感じた。その瞬間、愛犬のミニチュアダックスフントの「パル」が胸に飛び付いてきた。

「津波にやられる。早く逃げるよ」。娘の会社員久仁子さん(四)に、おかしい」と注意きた。栄子さんは一年前に病死した夫が孫のようにかわいがっていたパルを抱え、車に飛び乗った。

避難所の体育館受付に着くと「ペットは立ち入り禁止」と告げられた。パルを車に置きに行ったが、不安でほえ続ける。高齢の栄子も医師にストレスによるぜぜうこう炎と診断され

一緒に避難した愛犬のパルと仮設住宅で身を寄せ合う斉藤栄子さん＝宮城県石巻市で

さんが体育館に戻り、久仁子さんは車内に残った。ガソリンが切れ、避難所で配られた毛布で寒さに耐え、一夜を明かした。

避難所に救援物資が届いた翌朝、栄子さんが飲料水をパルに与え付いてきた。

ようとすると、住民に「人間が困っているのも会社から車で戻ってされた。ドッグフードを調達するため、運良く開いていた薬局に六時間並んで買った。

室内犬のパルは寒さに慣れていない。避難所の生活をあきらめ、親戚宅を転々とした。パルは慣れない環境に十万人より多い。それ医師にストレスによるとと非常時にスムーズに避難できるよう、中部地方の愛護団体や業者、住民の間で、日ごろの備えを呼び掛ける。

「飼い主の責任で災害に備えよう！」。ナゴヤドームで二十一、二十二の両日行われた動物ふれあいイベントで、犬、猫、鳥の姿の「やさしさ戦士　あいごマン」が訴えた。

■苦労しても「感謝」

五月末に石巻市内の仮設住宅に転居し、ようやく自分たちの空間が戻った。ただ、津波に奪われた一軒家のようにパルは自由に走り回れない。壁が薄く、

つかっていない。

愛犬との避難生活に苦労を重ねてきた斉藤さん親子だが、「パルがい良かったと思うこと方が多い」と口をそうえる。震災で失った友人を思って落ち込んだり、親子げんかになるとき、「パルが帰ってくると気が紛れ、明るい気持ちになる」と感謝する。

栄子さんの知人は愛犬を置いて避難したことを後悔し、うつの症状になり、「周りに迷惑を掛けてでも連れて行くべきだった」と涙ながらに語ったという。久仁子さんは「パ

ットを家族同然と考える人は多いけど、周りから冷たい目で見られることもある。飲料水やドッグフードなどの備えをしておけばよかった」と振り返る。

■周囲が理解も

「ペットと離れられない」という飼い主は多い。

岩手県釜石市の新里悦子さん(六)は自宅を流され、シーズーとパピヨンの雑種「クウ」と裏山の神社で三日間、避難生活を送った。六部屋ほどに約百人がすし詰めの状態で過ごしたが周囲の理解があり、三、四匹の小

暮らしの田中広子さん(七)は雑種犬の親子を飼っていた。二〇一〇年のチリ地震で津波が来た時は「避難所では犬が迷惑になる」と自宅にとどまった。愛犬は昨年二月までに親子とも死に、三月の震災

犬も「同居」。新里さんは他の避難者に配慮し昼間は極力クウを自宅を失い仮設住宅で暮らすが、「あの子たちが生きていたら今回も逃げなかった。私を逃がすために亡くなったと思っている」と感謝しているという。

ではなく家族同然と考えられるなら、やはり他人の迷惑にならないよう、一緒に避難できるようにしてほしい。ほかの避難所だったら一緒にいられなかったかも」

岩手県大槌町で一人

ほど同じ布団で眠れた。「クウちゃんは夜は同じ布団で眠れた。「イヌ」じゃなく家族。置いてくことなんて、できん。ほかの避難所に移った。

次回は30日掲載。地震予知について考えます。

愛護団体、業者が連携

名札や予防接種、啓発進む

日本動物愛護協会の東海地域統括岐阜支部によると、全国で飼育されている犬、猫は二千百五十万匹。〇～十五歳未満の人口千六百七十万人より多い。それだけ身近になったペットフード協会に

飼い主に啓発チラシを配って災害への備えを呼び掛ける「あいごマン」＝名古屋市東区のナゴヤドームで

が、ペットを大切に飼う年の震災以降は「予防接種を」「日ごろからケージ慣れを」などの呼びかけに重点を置くようになった。

中部地方では近い将来、東海・東南海・南海の三連動地震が発生し、余震を含め各地に被害が出る恐れがある。中部地方から西で唯一の組織の岐阜支部は、昨年九月に災害向けの啓発チラシ十二万枚を作成し、全国各地で配っている。

最初に配布に協力したのが、ペットショップなどの業者。愛護団体の中には、動物を取引することやペットの管理方法に批判的なメンバーもおり、これまでは「同居」。新里さんは他の避難者に配慮し昼間は極力クウを自宅を失い仮設住宅で暮らすが、「あの子たちが生きていたら今回も逃げなかった。私を逃がすために亡くなったと思っている」と感謝しているという。

次回は30日掲載。地震予知について考えます。

うことを啓発するため考えたマスコット。昨年の震災以降は「予防接種を」「日ごろから能止・同支部長(六)は「飼い主と最も頻繁に接するのは業者。連携することで啓発が進めば」と期待する。

小中学校や役所、自治会からもチラシを求められ、十二万枚はほぼ〝売り切れ〟状態は、昨年二月までに親子で互いに距離のある関係だった。愛知ペット事業組合や岐阜県動物取扱業者連絡会など六団体を通じ、千店以上にチラシを届けた。業者がまとまって協力するのは初めてで、各務

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2012年01月23日 中日新聞 朝刊 29頁

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2012年01月23日 中日新聞 朝刊 29頁

ずっと我慢していた

こんなに怖い夫の顔を見たのはいつ以来だろうか。電話口で声を荒らげる光一さんの横顔を、幸さんはかたずをのんで見つめていた。

電話の相手は東京電力。これまで原発事故の賠償は幸さんの「担当」だった。だが問い合わせをするたび「担当者がいない」「取り込んでいる」と取り合ってもらえないことが続いていた。

そんな時だった。賠償にさほど関心を見せていない様子だった光一さんが「おれが電話する」と言いだしたのだ。「これまでずっと夫は我慢していたんだ」。頼もしさを感じつつ、幸さんは気付かされた。

不満をため込んでいるのは光一さんばかりではない。家族が暮らす仮設住宅でもささいなトラブルが目立つようになった。慣れない雪かきをめぐり「あの家は協力的でない」と陰口をたたく人が出てきたのだ。

1月中旬の早朝、仮設住宅の前の道で自動車同士の事故が起きた。幸い物損で済んだが、近くで雪かきをしていた幸さんは「雪かきも手伝わずに出かけるから事故に遭うんだ」というつぶやきを耳にした。

「情けなくて、なんだか天気まで恨めしくなった」。本格的な冬を迎えた会津地方はこのところ曇りか雪ばかり続いている。「太陽がまぶしい古里の浜が懐かしい」。無理と承知はしていてもそんな弱気が口をつく。

塙（はなわ）さん一家　原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生活。

いつの日か
原発1キロからの避難
—30—

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています